

大学生の嫉妬に及ぼす自己愛的傾向の影響

Jealousy and Narcissism among college students

北村美菜子¹ Minako KITAMURA

緒賀 郷志 (岐阜大学教育学部) Satoshi OGA

要約

本研究では、大学生243名について、誇大的なナルシズムと過敏的なナルシズムの2つのタイプの自己愛的傾向が、社会的関係における嫉妬感情と嫉妬行動、社会的比較における嫉妬感情と嫉妬行動にどのように影響しているかを検討した。嫉妬に関する尺度構成の結果、社会的関係の嫉妬感情は、混乱、不満、嫉妬行動は、直面行動、我慢行動、報復行動の下位尺度が得られた。社会的比較の嫉妬感情は、苛立ち、あきらめ、嫉妬行動は、拒否行動、努力行動という下位尺度が得られた。自己愛的傾向を誇大群、過敏群、自己愛低群の3群に分類して分析した結果、誇大群の方が不満を感じやすく、特に女性において、報復行動、あきらめ、拒否行動が高かった。

キーワード：嫉妬 (jealousy, envy) 社会的関係 (social relation)
社会的比較 (social comparison) 自己愛的傾向 (narcissistic tendencies)

問題と目的

嫉妬には社会的関係における嫉妬と、社会的比較における嫉妬が存在する (Bers & Robin, 1984)。前者は「①既存の関係が第三者によって脅かされる状況」で生じる嫉妬であり、後者は「②自分より他者のほうが優れている状況、他者(競争相手)が成功や利益を享受している状況」で生じる嫉妬である (坪田・深田, 1991)。いずれの状況であっても、そこで生じる嫉妬感情は、どろどろとしたものであり、時に人間関係の亀裂を作り、トラブルを引き起こす要因になりえる。たとえば恋愛のもつれによる事件は、社会的関係における嫉妬が原因によるものが多いと考えられる。また社会的比較における嫉妬感情が加害行動に結びついた具体例としては、2010年には、幸福な親子に嫉妬したある母親が、2か月と3か月の乳児の足を骨折させた事件 (産経ニュース, 2010年8月9日) があげられよう。さらに清水・麦島・高橋 (1985) によると、学校内のいじめの被害者側には「わたしをひがんだり、しっとして」いじめられた、と回答する子どもがいたことが報告された。このように、嫉妬は人間関係の中で生きていく私たちが理解

しておくべき重要な感情だと言えよう。

ところで、石川 (2009) によると、嫉妬の情動が起こる過程には3つの段階がある。「①社会的状況のなかに存在する格差の自覚と当事者が自尊心への刺激を認知するまでの過程 (認知過程) ②その認知に動機づけられ、自尊心の防御を求めてさまざまな内的試行錯誤を行う過程 (内的過程) ③次いでその試行錯誤の結果、あらためて状況的現実に対応する過程 (反応過程)」である。つまり、嫉妬感情の喚起は、「理不尽にも、不当に傷つけられた自尊心」を救済するメカニズムに基づいている (石川, 2009)。この観点からすれば、同じ状況におかれた場合においても、自尊心の傷つけられやすさによって、生じる嫉妬感情の強さに違いが生じると言えよう。自尊心の傷つけられやすさと関連するのは自己愛の障害である。

自己愛的傾向は「自己を価値あるものと感じようとし、それを他者にも認めてもらおうとする傾向」であり、そのこと自体は健康な人にも見られる一方、自己愛が歪められた形や未熟な形で出現する自己愛の障害が存在する (上地・宮下, 2005)。自己愛の障害には、Kernbergの

考えに基づく周囲を気にかけない「無関心型」とKohutに基づく周囲を過剰に気にする「過敏型」の2類型があると現時点においては考えられている (Gabbard, 1989, 1994)。両者は一見相いれない2類型のようにみえるが、過敏型自己愛者においては自分の発言や行動に対する承認・賞賛を強く求める特徴があるように(上地, 2009), 無関心型自己愛的傾向者もまた, 他者から愛されたい欲求が過剰である特徴がある(上地・宮下, 2005)。すなわちいずれの類型においても自尊心が刺激されやすく, 傷つけられやすいといえる。

過去, 嫉妬と自己愛を検討した研究では堤 (2006) がある。堤 (2006) は, 嫉妬傾向尺度と自己愛傾向尺度, 自尊感情尺度との関係を調べるために重回帰分析を試みた。使用した尺度は小塩 (1998) のNPI簡略版の自己愛傾向尺度である。嫉妬傾向尺度は社会的関係に関する10状況, 社会的比較に関する10状況を表わす20項目から構成された尺度が使用された。堤の調査の結果では, 社会的関係に関する嫉妬因子は, 自己愛傾向の注目・賞賛欲求因子とのみ有意な関係にあった。また自尊感情尺度とでは, 評価過敏因子とのみ有意な関連があった。社会的比較による嫉妬因子は, 自己愛傾向の注目・賞賛欲求と自己主張の2因子と有意な関係にあった。しかし, 小塩 (1998) のNPI簡略版尺度は, D S M-IIIにおける自己愛性人格障害の記述をもとに作成された, 自己顕示, 自己耽溺, 自己誇大化などの自己愛の誇大的な側面が主に測定されている点で, 主にKernbergによる「無関心型」を測定しているといえる。小塩 (2002) は, NPI簡略版の下位尺度である「注目・賞賛欲求」は過敏型に触れる部分があると解釈したが, 上地 (2009) は, Kohutの病的な自己愛的傾向の測定には最適の尺度ではないと指摘した。その指摘を踏まえるとNPI簡略版では, Gabbard (1989, 1994) によって提示された過敏型の自己愛と嫉妬との関係を明らかにすることができないといえよう。

本研究では, 以上の点を踏まえ, Gabbard (1989) の考え方をもとに作成された高橋 (1998) のナルシズム尺度を用いて, 過敏型である

「周囲を気にする傷つきやすいナルシズム」と誇大型である「周囲を気にかけない誇大的なナルシズム」が, 嫉妬に対してどのように影響しているかを明らかにすることを目的とする。

ところで, 春日 (2010) は津江・馬場園 (2008) を参考に, 大学生を対象とした社会的関係と社会的比較における架空の場面を設定し, 嫉妬感情と嫉妬行動の測定する尺度を作成し, 自尊感情との関係を明らかにした。彼女の研究によると, 社会的関係における嫉妬感情と嫉妬行動の下位因子は, それぞれ「不安」「不満」「混乱」と「関係修復」「干渉」「報復」「関係清算」「仮面」が見出され, 社会的比較における嫉妬感情と嫉妬行動の下位因子は, それぞれ「苛立ち」「あきらめ」と「拒否」「自己啓発」「受容」「モデリング」が見出された。社会的関係における嫉妬場面では, 自尊感情が低いと, 嫉妬感情の「不満」「混乱」が高くなることが示された。社会的比較における嫉妬場面では, 自尊感情が低いと嫉妬感情の「苛立ち」「あきらめ」が高くなり, 拒否行動に向かうことが示された。この研究は, 大学生においては, さまざまな嫉妬感情と嫉妬行動が見られ, それらが自尊感情と関連があることを明らかにした。今回の研究は, この春日の研究を踏まえ, さまざまな嫉妬感情および嫉妬行動が, 先に述べた誇大型自己愛傾向および過敏型自己愛傾向にどのように影響されるのかを明らかにすることが目的である。

方法調査協力者: 岐阜県内の大学生253名であった。その内訳は, 男性は121名, 女性は132名であった。そのうち有効回答者数は, 243名であった。内訳は男性116名, 女性127名であった。平均年齢は19.6歳 ($SD=1.38$) であった。

調査の時期: 2010年11月上旬～下旬

実施方法: 大学の授業前に調査用紙を配布し, 授業後回収した。また, 知人に配布を依頼し, 配布から2週間後に回収した。回答はいずれも無記名で行われた。

質問紙の構成: 性別, 学年, 年齢, 恋人の有無を尋ねたうえ, 以下の3尺度を用いた。

社会的関係における嫉妬尺度: 社会的関係において生じる嫉妬感情, 嫉妬行動を測定するために, 春日 (2010) が作成した嫉妬場面と嫉妬傾

向尺度をより洗練し、改変したものを用いた。具体的には、著者および心理学専攻大学生との検討を踏まえ、嫉妬場面は、より嫉妬を喚起しやすい内容になることを考慮して一部文章を省いた。さらに嫉妬傾向尺度では、春日 (2010) の結果において複数因子への因子負荷量が高い項目を削除するとともに、同一因子内の他の項目内容との整合性を考慮して、一部項目内容について修正・削除をおこなった。

本調査で用いた、社会的関係において生じる嫉妬場面は「Aには、恋人Bがいる。Bは、Aと会う約束があったのにAと同性的見知らぬCに会っている。Bは、Aと会っている時でもCの話ばかりする。」であり、この場面に対して、「あなたはAになったつもりで、以下の質問に当てはまる」ものを、「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。項目数は、嫉妬感情13項目、嫉妬行動20項目である。

社会的比較における嫉妬尺度：社会的比較において生じる嫉妬感情、嫉妬行動を測定するため、上記同様に、春日 (2010) が作成した嫉妬傾向尺度を修正したものを用いた。社会的比較によって生じる嫉妬場面は「Aには、同性の知り合いBがいる。Bは、顔やスタイルが良い。Bは、Aの得意なことを、もっと上手にできる。」であり、Aの立場に立ち、Aの感情と行動について、適当であると考える回答を嫉妬感情12項目、嫉妬行動12項目に対して同じく4件法で評定を求めた。

自己愛的傾向尺度：高橋 (1998) が作成した自己愛的傾向尺度を用いた。この尺度は、全25項目あり、「周囲を気にする傷つきやすいナルシズム」14項目と「周囲を気にかけない誇大的なナルシズム」11項目で構成されている。高橋では6段階評定であったが、回答のしやすさを考慮して本研究では4件法での評定を求めた。

結果
以下の分析は、Windows Vista上で、R2.12.0を用いて行った。

1. 尺度構成
社会的関係における嫉妬の尺度：社会的関係における嫉妬感情の項目得点全13項目について因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子を抽出した。第1, 第2どちらの因子に対しても、因子負荷量が0.35以上であること、項目の内容や、 α 係数の上昇を考慮しながら2項目を除外した。最終的に11項目を再度、因子分析した結果、第1因子に負荷量の高い6項目、第2因子に負荷量の高い5項目が得られた (Table 1)。第1因子は、Bに対して自分の立場が危うくなることで、気持ちが乱れている状態を示す項目のまとめりであると解釈できるので、「混乱」因子と命名した。第2因子は、Bに対してあきらめや怒りなどのマイナスの感情を抱いている

Table 1 社会的関係における嫉妬感情尺度の因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転)

No.	項目内容	混乱	不満
12	自分はBにとって何なのだろうと思う。	0.94	-0.11
06	Bは自分のことを好きでないのではないかと思えば不安になる。	0.76	-0.08
11	自分とBが付き合っている意味がわからなくなる。	0.75	0.11
02	BはCのことが好きなのではないかと疑う。	0.57	0.09
05	CはBのことが好きなのではないかと疑う。	0.40	0.14
04	Bに自分の事も考えてほしいと思う。	0.37	0.17
01	そういった行動をとるBにあきれる。	-0.17	0.76
13	Bに怒りを感じる。	0.08	0.67
03	この状況がつまらないと思う。	-0.03	0.53
08	Bに失望する。	0.27	0.49
07	自分も他の人と遊んでみようかなと思う。	-0.16	0.41
		因子間相関	I II
		I	— 0.60
		II	— —

削除項目： 10 Cがどんな人か気になる。
09 悩むことが苦しいと思う。

Table 2 社会的関係における嫉妬行動尺度の因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転)

No.	項目内容	報復行動	直面行動	我慢行動	
12	他の誰かと浮気をする。	0.68	0.04	0.04	
19	Bのことを相手にしない。	0.67	0.12	-0.02	
06	Bと別れる。	0.63	-0.06	-0.08	
04	Bと距離を置く。	0.62	-0.11	0.04	
08	Bがしたことと同じことをする。	0.54	-0.02	0.06	
11	Bの悪口を他の人に言う。	0.54	-0.11	0.08	
18	Cの悪口を他の人に言う。	0.51	0.12	0.03	
17	Bに内緒で後をつける。	0.46	0.06	0.04	
07	Cに対して怒った態度をとる。	0.34	-0.01	-0.12	
03	Bに対する不信感の気持ちをBに打ち明ける。	-0.09	0.80	-0.21	
09	自分が思ったこと, 感じたことをBに伝える。	-0.09	0.77	-0.10	
16	今の気持ちをBに聞く。	0.05	0.65	0.11	
13	どうしてCと会ったのかBに聞く。	0.05	0.53	0.04	
05	なんともないふりをする。	0.01	-0.17	0.73	
02	我慢する。	-0.02	-0.16	0.61	
20	自分磨きをする。	-0.11	0.17	0.37	
10	BがするCの話を喜んで聞く。	-0.02	-0.04	0.36	
14	事実を受け止める。	-0.06	0.10	0.33	
		因子間相関	I	II	III
		I	—	0.03	0.00
		II		—	-0.09
		III			—
削除項目 :	15	CにあまりBが会わないように頼む。			
	01	BにあまりCと会わないように頼む。			

Table 3 社会的比較における嫉妬感情尺度の因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転)

No.	項目内容	苛立ち	あきらめ	
06	このことを考えただけで, むしゃくしゃする。	0.86	-0.06	
05	こんなことになって, くやしい。	0.74	-0.02	
02	Bの顔は, できるだけ見たくない。	0.69	-0.01	
09	つらくてたまらない。	0.54	0.23	
07	Bのことが, 信じられない。	0.53	0.02	
10	自分のことが, 恥ずかしい気がする。	-0.04	0.76	
11	自分のいる場所が, なくなってしまう。	0.10	0.73	
12	自分は, Bのようになれるがはずがない。	-0.21	0.60	
03	なんとなく, さみしい。	0.27	0.36	
		因子間相関	I	II
		I	—	0.53
		II		—
削除項目 :	01	もう, どうしようもないんだ。		
	04	Bにだけには, 負けたくない。		
	08	Bは自分より, もともとよくできるのだ。		

Table 4 社会的比較における嫉妬行動尺度の因子分析結果（最尤法, プロマックス回転）

No.	項目内容	努力行動	拒否行動
08	自分も, Bのようになるため, 努力する。	0.69	0.13
12	自分磨きをする。	0.68	-0.14
11	自分なりに出来ることを探して, 取り組んでみる。	0.67	-0.09
02	自分のいいところを, のばすようにする。	0.66	-0.13
03	Bに近づいて, 良さをまねしようとする。	0.60	0.12
09	Bにどうすればうまくできるか聞いてみる。	0.53	0.22
01	Bの悪口を言う。	-0.05	0.76
10	Bが, 困るようなことをする。	0.05	0.75
05	Bに, なんとなく冷たくあたる。	-0.01	0.69
04	他の友達に, Bの事をどう思うか聞いてみる。	0.08	0.60
06	自分は何をしてもだめなのだと, 何もしない。	-0.31	0.52
因子間相関		I	II
		I	-
		II	-

削除項目： 07 今まで以上に, Bと親しく付き合う。

状態を示す項目のまとめりと考えられたことより, 「不満」因子と命名した。因子負荷量が高かった項目得点の合計を下位尺度得点とした。α係数は「混乱」尺度は, α=.837, 「不満」尺度は, α=.693であった。

社会的関係の嫉妬行動の項目得点全20項目についても同様のプロセスを経て, 最終的に18項目を再度, 因子分析した結果, 第1因子に負荷量の高い9項目, 第2因子に負荷量の高い4項目, 第3因子に負荷量の高い5項目が得られた (Table 2)。第1因子は, AはBに対して自分が受けたつらさを相手に経験させる行動をとっていると考えられるので, 「報復行動」因子と命名した。第2因子は, Aが自分の気持ちをBに伝えたり, BにCと会った経緯を尋ねていることから, 真実に直面する行為であると解釈できるので「直面行動」因子と命名した。第3因子は, Aは不快な感情を抱きながらも, Bに対してマイナスとなる行動をとらないことから「我慢行動」因子と命名した。因子負荷量が高かった項目得点の合計を下位尺度得点とした。α係数は「報復」尺度は, α=.798, 「直面行動」尺度は, α=.775, 「我慢行動」尺度は, α=.601であった。

社会的比較における嫉妬の尺度：社会的比較における嫉妬場面で喚起される嫉妬感情の項目得点全12項目について, 因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。固有値の減衰状況と

因子の解釈可能性から2因子を抽出した。第1, 第2のどちらの因子に対しても, 因子負荷量が0.35に満たないもの2項目, 第1, 第2因子どちらに対しても因子負荷量が0.35より大きいもの1項目を除外した。最終的に9項目の因子分析の結果, 第1因子に負荷量が高い5項目, 第2因子に負荷量が高い4項目が得られた (Table 3)。第1因子は, AがBに対してとげとげしい感情を抱いていたと解釈できるので「苛立ち」因子と命名した。第2因子は自信を喪失し, 向上心を失っていると考えられるため「あきらめ」因子と命名した。因子負荷量が高かった項目得点の合計を下位尺度得点とした。α係数は「苛立ち」尺度は, α=.817, 「あきらめ」尺度は, α=.711であった。

社会的比較の嫉妬場面で喚起される嫉妬行動における項目得点全12項目についても同様に因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子を抽出した。その後, α係数の上昇を考慮して1項目を除外した。最終的に11項目の因子分析の結果, 第1因子に負荷量が高い6項目, 第2因子に負荷量が高い5項目が得られた (Table 4)。第1因子は, AがBのようになるために努力していると考えられるので「努力行動」因子と命名した。第2因子は, AがBに対して, 好意的ではない行動をしているため「拒否行動」因子と命名した。因子負荷量が高かった項目得

点の合計を下位尺度得点とした。 α 係数は「努力行動」尺度は、 $\alpha=.791$ 、「拒否行動」尺度は、 $\alpha=.789$ であった。

自己愛的傾向尺度：自己愛的傾向尺度の項目得点全25項目について、高橋 (1998) と同じ2因子を指定して、因子分析 (最尤法, バリマックス回転) を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から高橋 (1998) と同様に2因子構造が妥当と解釈した。第1, 第2因子を構成する項目は、それぞれ高橋の項目と同様の結果であった。高橋によると、第1因子は、傲慢で周囲のことを気にかけないタイプであると分類され「周囲を気にかけない誇大的なナルシズム」因子、第2因子は、周囲のことを過剰に気にし、敏感で傷つきやすいタイプであると分類され「周囲を気にする傷つきやすいナルシズム」因子と命名されていた。しかし、本研究では以下、簡潔に「誇大性ナルシズム」「過敏性ナルシズム」と呼ぶ。因子負荷量が高かった項目得点の合計を下位尺度得点とした。 α 係数は「誇大性ナルシズム」尺度は、 $\alpha=.862$ 「過敏性ナルシズム」尺度は、 $\alpha=.880$ であった。

2. 性差の検討：嫉妬感情, 嫉妬行動, 自己愛的傾向にそれぞれ性差があるかを調べるために、男 ($N=116$) 女 ($N=127$) の2群間について、対応のないt検定を行った。社会的関係における嫉妬感情では、「混乱」においてのみ女性 ($M=18.97, SD=3.71$) が男性 ($M=17.27, SD=4.00$) よりも有意に高かった ($t(241)= 3.44, p<.001$)。社会的比較における嫉妬感情では、「あきらめ」において女性 ($M=9.40, SD=2.81$) が男性 ($M=8.22, SD=2.65$) よりも有意に高かった ($t(241)= 3.38, p<.001$)。自己愛的傾向では、「誇大性ナルシズム」において男性 ($M=29.97, SD=6.76$) が女性 ($M=27.17, SD=7.56$) よりも有意に高かった ($t(241)= 2.09, p\leq .05$)。「過敏性ナルシズム」においては女性 ($M=30.65, SD=5.79$) が男性 ($M=28.96, SD=6.83$) よりも有意に高かった ($t(241)= 3.02, p<.01$)。以上のことから、女性は男性に比べて「混乱」と「あきらめ」の嫉妬感情を強く抱くことが明らかになった。なお、本研究で嫉妬に対する説明変数とした自己愛傾向においては、男女間に有意な差が見られたこと

から、これ以降は男女別で分析を行った。

3. 恋人の有無による検討：「恋人がいる」「恋人がいた」「恋人がいたことがない」で、嫉妬感情, 嫉妬行動, 自己愛的傾向にそれぞれ差があるかどうかを調べるために、恋人の有無の3群間について男女別に分散分析を行った。

男性では、社会的関係における嫉妬感情の「不満」の得点についてのみ、1%水準で有意な差が見られた ($F(2,113)=6.21, p<.01$)。Tukey法の多重比較の結果、「恋人がいる」群 ($M=14.0, SD=3.03, N=39$)、「恋人がいた」群 ($M=13.30, SD=3.50, N=50$) の得点は「恋人がいない」群 ($M=11.26, SD=2.70, N=27$) の得点より、有意水準5%で有意に高かった。したがって現在過去を問わず恋人関係の経験がある人の方が、不満を感じやすいことが明らかになった。女性では、社会的関係における嫉妬行動の「直面行動」と社会的比較における嫉妬感情の「あきらめ」の得点について5%水準で有意な差が見られた ($F(2,124)=4.73; F(2,124)=3.38$)。また、「過敏性ナルシズム」の得点で5%の有意な差が見られた ($F(2,124)=4.33$)。Tukey法の多重比較の結果、「直面行動」では、「恋人がいる」群 ($M=11.88, SD=2.71, N=42$)、「恋人がいた」群 ($M=11.02, SD=2.36, N=54$) の得点は「恋人がいない」群 ($M=9.94, SD=3.11, N=31$) の得点より、有意水準5%で有意に高かった。同様に多重比較の結果、「あきらめ」では、「恋人がいた」群 ($M=9.89, SD=3.04, N=54$)、「恋人がいない」群 ($M=9.77, SD=2.72, N=31$) の得点は「恋人がいる」群 ($M=8.50, SD=2.36, N=42$) の得点より、有意水準5%で有意に高かった。「過敏性ナルシズム」の多重比較では、「恋人がいた」群 ($M=31.51, SD=5.19, N=54$)「恋人がいない」群 ($M=31.97, SD=4.81, N=31$) の得点は「恋人がいる」群 ($M=28.57, SD=6.67, N=42$) の得点より、有意水準5%で有意に高かった。したがって、恋人関係の経験のある人の方が社会的関係における嫉妬場面において事実直面する行為をとる傾向が高く、恋人が現在いない人は、社会的比較における嫉妬場面においてあきらめの感情を持ちやすく、周囲を気にする傷つきやすいナルシズム傾向が強いことが明らかになった。

4. 社会的関係における嫉妬感情, 嫉妬行動, 自己愛的傾向との相関: 男女別の社会的関係における嫉妬と自己愛的傾向の尺度間相関を Table 5に示す。

男性における「混乱」得点は、「不満」得点との間で正の有意な強い相関 ($r=.50, p<.001$), 「報復行動」得点との間で正の有意な中程度の相関 ($r=.31, p<.001$), 「過敏性」得点との間で正の弱い相関 ($r=.25, p<.01$) が見られた。「不満」得点は、「直面行動」得点との間で正の有意な弱い相関 ($r=.21, p\leq.05$), 「報復行動」得点との間で正の有意な強い相関 ($r=.56, p<.001$), 「誇大性」得点との間で有意な中程度の相関 ($r=.35, p<.001$) が見られた。「我慢行動」得点は、「過敏性」得点との間で正の中程度の有意な相関 ($r=.33, p<.001$) が見られた。「報復行動」得点は、「誇大性」得点との間で正の有意な弱い相関 ($r=.29, p<.01$) が見られた。

女性における「混乱」得点は、「不満」得点との間で有意な正の強い相関 ($r=.58, p<.001$), 「報復行動」得点との間で正の有意な中程度の相関 ($r=.37, p<.001$) が見られた。「不満」得点は、「我慢行動」得点との間で有意な弱い負の相関

($r=-.27, p<.01$), 「報復行動」得点との間で有意な強い正の相関 ($r=.59, p<.001$), 「誇大性」得点との間で有意な弱い相関 ($r=.23, p<.01$) が見られた。「我慢行動」得点は、「報復行動」得点との間で有意な弱い負の相関 ($r=-.23, p<.01$), 「過敏性」得点との間で正の弱い有意な相関 ($r=.21, p\leq.05$) が見られた。「報復行動」得点は、「誇大性」得点との間で正の有意な中程度の相関 ($r=.40, p<.001$) が、「過敏性」得点との間で有意な弱い正の相関 ($r=.20, p\leq.05$) が見られた。

5. 社会的比較における嫉妬感情, 嫉妬行動, 自己愛的傾向との相関: 男女別の社会的比較における嫉妬と自己愛的傾向の尺度間相関を Table 6に示す。男性における「あきらめ」得点は、「苛立ち」得点との間で有意な強い正の相関 ($r=.60, p<.001$), 「拒否行動」得点との間で有意な強い正の相関 ($r=.58, p<.001$), 「過敏性」得点との間で有意な弱い正の相関 ($r=.25, p<.01$) が見られた。「苛立ち」得点は、「拒否行動」得点との間で有意な非常に強い正の相関 ($r=.73, p<.001$), 「誇大性」得点との間で弱い相関 ($r=.27, p<.01$), 「過敏性」得点との間で有意な正の中程度の相関 ($r=.38, p<.001$) が見られた。「拒

Table 5 男女別の社会的関係における嫉妬間, 自己愛的傾向と嫉妬間の相関

		男						
女		混乱	不満	我慢行動	直面行動	報復行動	誇大性	過敏性
	混乱	—	.50***	.03	.15	.31***	.11	.25**
	不満	.58***	—	-.05	.21*	.56***	.35***	-.05
	我慢行動	-.12	-.27**	—	-.11	.15	-.15	.33***
	直面行動	.11	.12	-.18	—	-.01	.13	-.09
	報復行動	.37***	.59***	-.23**	.03	—	.29**	-.03
	誇大性	-.05	.23**	-.01	.08	.40***	—	.06
	過敏性	.00	.01	.21*	-.14	.20*	.18	—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p\leq.05$ 男 (右上): $n=116$ 女 (左下): $n=127$

Table 6 男女別の社会的比較における嫉妬間, 自己愛的傾向と嫉妬間の相関

		男					
女		あきらめ	苛立ち	拒否行動	努力行動	誇大性	過敏性
	あきらめ	—	.60***	.58***	-.14	.09	.25**
	苛立ち	.44***	—	.73***	-.06	.27**	.38***
	拒否行動	.46***	.63***	—	-.16	.14	.31***
	努力行動	-.03	-.02	-.19	—	.18	.06
	誇大性	.25**	.48***	.48***	.22*	—	.06
	過敏性	.38***	.19	.16	.13	.18	—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p\leq.05$ 男 (右上): $n=116$ 女 (左下): $n=127$

Table 7 男性における「自己愛的傾向」3群と「嫉妬」の平均, 標準偏差, F値, p値

			誇大群(A)	過敏群(B)	自己愛低群(C)	F値(df=2.113)	p値	多重比較
社会的関係 嫉妬感情	混乱	mean	17.4	17.5	16.7	0.41	0.663	
		sd	(4.63)	(3.71)	(4.12)			
	不満	mean	14.8	12.5	12.3	4.32	0.015*	A>B=C
		sd	(2.54)	(3.10)	(3.83)			
社会的関係 嫉妬行動	我慢行動	mean	11.3	13.9	12.3	8.17	p<.001***	B>A=C
		sd	(2.96)	(2.77)	(2.68)			
	直面行動	mean	11.5	10.4	10.6	1.17	0.313	
		sd	(2.76)	(2.94)	(3.26)			
	報復行動	mean	17.7	15.2	15.1	2.37	0.098	
		sd	(4.38)	(5.00)	(5.13)			
社会的比較 嫉妬感情	あきらめ	mean	8.4	8.4	7.8	0.68	0.509	
		sd	(2.69)	(2.67)	(2.63)			
	苛立ち	mean	10.0	8.9	6.9	8.47	p<.001***	A=B>C
		sd	(3.88)	(3.04)	(1.81)			
社会的比較 嫉妬行動	拒否行動	mean	8.0	8.1	6.6	3.97	0.022*	A=B>C
		sd	(3.39)	(2.41)	(2.06)			
	努力行動	mean	18.3	17.7	17.3	0.64	0.635	
		sd	(3.83)	(3.82)	(4.04)			

***p<.001, *p≤.05 誇大群:n=23 過敏群:n=61 自己愛低群:n=32

Table 8 女性における「自己愛的傾向」3群と「嫉妬」の平均, 標準偏差, F値, p値

			誇大群(A)	過敏群(B)	自己愛低群(C)	F値(df=2.124)	p値	多重比較
社会的関係 嫉妬感情	混乱	mean	18.4	19.4	18.9	0.43	0.649	
		sd	(4.30)	(3.71)	(3.55)			
	不満	mean	15.0	13.1	13.1	3.38	0.037*	A>B=C
		sd	(3.05)	(3.25)	(2.94)			
社会的関係 嫉妬行動	我慢行動	mean	12.7	14.3	13.0	2.85	0.061	
		sd	(2.72)	(2.91)	(2.84)			
	直面行動	mean	11.2	10.9	11.1	0.11	0.896	
		sd	(3.21)	(2.14)	(2.89)			
	報復行動	mean	19.4	16.1	14.8	8.43	p<.001***	A>B=C
		sd	(6.43)	(4.24)	(3.87)			
社会的比較 嫉妬感情	あきらめ	mean	10.0	10.7	8.6	7.54	0.001***	A>B=C
		sd	(3.11)	(2.75)	(2.49)			
	苛立ち	mean	10.6	8.7	7.9	7.03	0.001***	A=B>C
		sd	(4.12)	(2.51)	(2.71)			
社会的比較 嫉妬行動	拒否行動	mean	10.3	7.6	7.3	11.42	p<.001***	A>B=C
		sd	(3.86)	(2.03)	(2.35)			
	努力行動	mean	19.1	18.3	17.6	1.58	0.211	
		sd	(3.16)	(3.41)	(3.48)			

***p<.001, *p≤.05 誇大群:n=21 過敏群:n=34 自己愛低群:n=72

否行動」得点は、「過敏性」得点との間で正の有意な中程度の相関 ($r=.31, p<.001$) が見られた。

女性において、「あきらめ」得点は、「苛立ち」得点との間で有意な中程度の正の相関 ($r=.44, p<.001$), 「拒否行動」得点との間で有意な中程度の正の相関 ($r=.46, p<.001$), 「誇大性」得点との間で正の有意な弱い相関 ($r=.25, p<.01$), 「過敏性」得点との間で正の有意な中程度の相関 ($r=.38, p<.001$) が見られた。「苛立ち」得点は、「拒否行動」得点との間で有意な高い正の相関 ($r=.63, p<.001$), 「誇大性」得点との間で有意な中程度の相関 ($r=.48, p<.001$) が見られた。「拒否行動」得点は、「誇大性」得点との間で有意な中程度の相関 ($r=.48, p<.001$) が見られた。「努力行動」得点は、「誇大性」得点との間で有意な弱い正の相関 ($r=.22, p\leq.05$) が見られた。

6. 男女別の自己愛的傾向による群分けと、それによる嫉妬感情と嫉妬行動：男性と女性それぞれにおいて、「誇大性」、「過敏性」の下位尺度得点を標準化して、クラスタ分析(ユークリッド平方、ウォード法)を行った。デンドログラムを参考にいずれも3群に分けた。その3群の特徴を確かめるために3群と「誇大性」、「過敏性」でそれぞれ一要因分散分析を行った。その結果、男性の場合、自己愛的傾向の「誇大性」は、0.1%水準で有意であった ($F(2,113) = 81.84, p<.001$)。「過敏性」は、0.1%水準で有意であった ($F(2,113) = 48.38, p<.001$)。Tukey法における多重比較の結果、「誇大性」における、3群間の関係は「A群 ($M=40.09, SD=3.40, N=23$)」>「B群 ($M=28.44, SD=4.20, N=61$)」>「C群 ($M=25.59, SD=5.19, N=32$)」となった。また、「過敏性」における、3群間の関係は「B群 ($M=32.90, SD=4.27, N=61$)」>「A群 ($M=28.04, SD=7.77, N=23$)」>「C群 ($M=22.09, SD=3.88, N=32$)」となった。そこで、A群は「誇大性」得点が一番高かったため、「誇大群」と名付けた。B群は「過敏性」得点が一番高かったため、「過敏群」と名付けた。C群は「誇大性」得点、「過敏性」得点が3群内において共に低かったため「自己愛低群」と名付けた。女性の場合、自己愛的傾向の「誇大性」は、0.1%水準で有意であった ($F(2,124) = 84.32, p<.001$)。「過敏性」は、0.

1%水準で有意であった ($F(2,124) = 82.53, p<.001$)。Tukey法における多重比較の結果、「誇大性」における3群間の関係は「A群 ($M=40.00, SD=3.70, N=21$)」>「B群 ($M=24.12, SD=4.02, N=34$)」=「C群 ($M=24.87, SD=5.62, N=72$)」となった。また、「過敏性」における3群間の関係は「B群 ($M=37.00, SD=2.77, N=34$)」>「A群 ($M=32.81, SD=4.34, N=21$)」>「C群 ($M=27.03, SD=4.08, N=72$)」となった。そこで、男性の場合同様にA群は「誇大群」、B群は「過敏群」、C群は「自己愛低群」と名付けた。男女ともに、「自己愛低群」は3群の中では、自己愛の歪みをもっとも少ない群と考えられる。

男女別に、その3群と、社会的関係における嫉妬感情と嫉妬行動、社会的比較における嫉妬感情と嫉妬行動について、各因子の下位尺度得点それぞれを従属変数とした一要因分散分析とTukey法による多重比較を行った。結果をTable 7, 8に示す。

社会的関係における嫉妬場面では、男女とも「不満」は、「誇大群」>「過敏群」=「自己愛低群」という順で強く感じられていた。また、男性では「我慢行動」について、「過敏群」>「誇大群」=「自己愛低群」、女性では「報復行動」について、「誇大群」>「過敏群」=「自己愛低群」という順でその行動をより取っていた。社会的比較における嫉妬場面では、男性では「苛立ち」と「拒否行動」で、「誇大群」=「過敏群」>「自己愛低群」という順で強かった。女性では「あきらめ」と「拒否行動」が「誇大群」>「過敏群」=「自己愛低群」という順で強かった。「苛立ち」は「誇大群」=「過敏群」>「自己愛低群」という順で強く感じられていた。

考察

男女を比較したところ、「混乱」「あきらめ」の嫉妬感情は、男性よりも女性の方が抱きやすいといえよう。

また社会的関係における嫉妬を「恋人がいる」「恋人がいた」人たちは「恋人がいない」人と比較すると、男性では「不満」のみが高く、女性では「直面行動」のみが高かった。男性で恋人がいない人は、異性との交際体験の欠如から異

性に対する憧れあるいは理想化があると考えられ、嫉妬が喚起される状況でも「不満」感情が低いのかもしれない。一方、女性で恋人がいない人は、交際体験がないため異性に対して慎重であると考えられ、嫉妬場面での「直面行動」が低いのかもしれない。

女性で（現在）「恋人がいない」人は過敏性ナルシズムが高かった。これは過敏性ナルシズムの特徴から説明できるだろう。上地・宮下(2005)によると、「他者が特別の配慮や敬意をもって接してくれることを期待し、その期待が満たされないと不満や怒りが生じる」といった「潜在的特権意識」があるため、男性がそのような過敏性の高い女性に付き合いたい気持ちを抱かない、あるいは付き合ったとしても付き合いきれなくなるからだろうと考えられる。逆に、女性自身が特別な配慮を強く求めるがゆえに、そのような男性を現実には得られないことがあるのかもしれない。

社会的関係における嫉妬尺度間の相関結果からは、男女ともに「混乱」「不満」が強くと「報復行動」が強くなる。しかしながら、男性は不満を感じると、事実を確かめるために相手に確認する積極的な行動をとるのに対して、女性は不満を感じると「なんともないふりをする」といった項目に見られるように、自分の中にため込む傾向があるといえる。社会的比較における嫉妬尺度間の相関結果からは、男女ともに、「あきらめ」や「苛立ち」を感じると、嫉妬感情を抱いた対象に、「Bの悪口を言う」、「Bが、困るようなことをする」といった相手を否定する行動を取る傾向があるといえる。

自己愛的傾向と社会的関係における嫉妬の間の相関結果からは、誇大性ナルシズムが強ければ、男女ともに社会的関係における嫉妬場面で相手に対して不満を抱きやすく、過敏性ナルシズムが強ければ、自分の中にため込んで我慢してしまいやすいと考えられる。また、女性は、自己愛的傾向が「過敏性」あるいは「誇大性」のいずれかが強ければ強いほど報復行動を取る傾向にあることから、男性よりも嫉妬場面における攻撃性に自己愛的傾向が強い影響を及ぼすといえよう。

自己愛的傾向と社会的比較における嫉妬の間の相関結果で、「拒否行動」に相関がみられたのは、男性では「過敏性」であり、女性では「誇大性」であった。「拒否行動」は嫉妬尺度間の相関で「苛立ち」と有意な強い相関があるが、「苛立ち」に関しても、男性は「過敏性」、女性は「誇大性」と相関が見られた。これらのことから、男性は自分よりかっよくて優秀な人を見た時に、過敏性ナルシズムが強ければ、羨ましさやひがみの感情が湧き、苛立ちを感じやすくなると考えられる。また、女性は自分より美しく優秀な人を見ると、誇大性ナルシズムが強ければ、プライドが傷つき、苛立ちを強く感じると考えられる。特に今回は、嫉妬場面に「顔やスタイルが良い」という内容が含まれていた。これについては男性よりも女性の方が容姿に気を配ると考えられる為、誇大性ナルシズムが強い女性は、苛立ちを感じたと考えられる。また、女性においては「誇大性」と「努力行動」にも相関が見られるため、相手を否定する行動だけでなく、相手を見習って自己向上行動も誘引しているところは留意すべき点であろう。これらの結果は、堤(2006)が述べた、嫉妬を感じる傾向は、自己愛の健康的な側面ではなく、病的側面に大きく関係しているという点を裏付けたものであろう。

自己愛的傾向のタイプと嫉妬との関連を検討するために、「誇大性ナルシズム」「過敏性ナルシズム」の2変数を用いてクラスタ分析をした結果、男女とも「誇大群」「過敏群」「自己愛低群」の3群に分けられた。この3群と従属変数である社会的関係と社会的比較における嫉妬感情・嫉妬行動について検討を行った結果から、「誇大群」では、「自己愛低群」や「過敏群」よりも男女ともに、社会的関係の嫉妬感情では「不満」、女性では、嫉妬行動で「報復行動」、社会的比較の嫉妬感情で「苛立ち」、嫉妬行動で「拒否行動」がより強く喚起されることが明らかになった。これらの結果は、上地(2009)がKernbergに基づいて述べたように、誇大自己傾向のある人は、攻撃性が高く、欲求不満耐性が弱いとされていることから説明が可能だと考えられる。したがって、自己愛的傾向の「誇大

性ナルシズム」の強い人は、社会的関係・社会的比較における嫉妬場面の両方で、嫉妬感情を感じやすく、相手の心を傷つけるような行動をとりやすいと考えられる。その傾向は、男性よりも女性の方が強く、「誇大性ナルシズム」の強い女性は、嫉妬を強く感じ、相手に危害を加える可能性のある報復行動をとりやすいと考えられる。

いっぽう「過敏群」では、「自己愛低群」や「誇大群」よりも男性では、社会的関係の嫉妬行動で「我慢行動」が喚起されることが明らかになった。これは、Gabbard (1994) によると、「過敏性」のタイプは「抑制的か、内気か、あるいは自分を表にだすことさえしない」と示されており、「過敏群」の男性は、恋人が他者に心を奪われてしまっても、事実を受け止め、パートナーに対しては危害を与えないと考えられる。

「自己愛低群」では、「誇大群」や「過敏群」よりも男性では、社会的比較の嫉妬感情で「苛立ち」、嫉妬行動で「拒否行動」、女性では社会的比較の嫉妬感情で「苛立ち」の程度が低かった。上地 (2009) によると、Kernbergの誇大性の自己愛的傾向とKohutの過敏性の自己愛的傾向はどちらも、重要な依存欲求を抑圧しており、本当の意味では他者に依存できない人である。またKohutとKernbergの理論に共通してみられるのは、理想に到達しようとする自己を賞賛する愛情的部分が欠けている「理想システムの障害」である。したがって、病理的な自己愛的傾向を有する人に比べて「理想システムの障害」がみられないと考えられる「自己愛低群」に属する男性では、「誇大群」や「過敏群」の人よりも攻撃性が弱く屈辱感も感じにくいため、自分より容姿が良く、有能なBを前にしても、むしろしゃべらず、向上心を失わず、Bが困るような行動も取らないと考えられる。「自己愛低群」に属する女性においても、「誇大群」や「過敏群」の人よりも屈辱感を感じにくく、自分よりも有能で美しい人を見ても、むしろしゃべることがないと考えられる。なお「自己愛的傾向」3群において嫉妬の下位尺度のうち、有意差が見られた嫉妬感情、嫉妬行動の9つのうち、「誇大群」が「過敏群」および「自己愛低群」に比

べて得点が高いものが5つであることから、自己愛的傾向の「誇大群」が「過敏群」よりも、嫉妬感情を抱きやすく、ネガティブな嫉妬行動をとりやすい可能性が考えられる。加えて、「誇大群」の得点が高い5つの嫉妬尺度のうち4つが女性であることから、特に男性よりも女性の方がその傾向が顕著であると言えよう。

以上のことから、自己愛的傾向が嫉妬に与える影響には男女差が見られ、男女とも病理的な自己愛的傾向が高い方は、嫉妬感情が強くなり、ネガティブな嫉妬行動をとるといえる。とりわけ女性において、「誇大性ナルシズム」タイプの人たちは、「過敏性ナルシズム」タイプの人たちよりも、社会的関係と社会的比較における嫉妬場面それぞれでネガティブな嫉妬感情を感じ、報復や拒否という攻撃的な嫉妬行動をとりやすいと考えられる。

問題と目的で述べたように、社会的事件や学校場面でのいじめなどにおいて嫉妬が要因とされることが多いことから、ネガティブな嫉妬感情や行動が喚起されないと考えられる健康的な自己愛を育てることが教育現場において求められるであろう。

文献

- Bers, S. S., & Rodin, J (1984). Social comparison Jealousy: A development and motivational study. *Journal of Personality and social Psychology*, 39, 766 - 799.
- Gabbard, G. O. (1989). Two Subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527 - 532.
- Gabbard, G.O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version. (館哲郎 (監訳) 1997. 精神力動的臨床医学—その臨床実践[DSM-IV版]—③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版社)
- 石川実 (2009). 嫉妬と羨望の社会学 世界思想社
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 日本パーソナリティ心理学会, 14(1), 80 - 91.
- 上地雄一郎 (2009). Kohutの自己愛性パーソナリティ障害論の批判的検討 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 141, 143 - 152.

- 春日聖子 (2010). 嫉妬感情の喚起に及ぼす自尊心の影響 岐阜大学教育学部 平成21年度卒業論文
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情—友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280 - 290.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴 教育心理学研究, 50, 261 - 270.
- MSN産経ニュース (2010). 足利乳児骨折事件 2010年8月9日
〈<http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/110122/trl11012222590130-n1.htm>〉 (2010年9月29日)
- 清水賢二・麦島文夫・高橋良彰 (1985). いじめに関する非行の実態調査研究(2) 科学警察研究所報告防犯少年編, 26, 144 - 161.
- 高橋智子 (1998). 青年のナルシズムに関する研究—ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成—日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.
- 坪田雄二・深田博己 (1991). 嫉妬感情に関する実証的研究の動向 広島大学教育学部紀要第1部, 39, 167 - 173.
- 津江美和・馬場園陽一 (2008). 自尊心が妬みの感情と行動に及ぼす効果について 高知大学教育心理学会第50回総会, 541.
- 堤雅雄 (2006). 嫉妬と自己愛：自己愛的欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), 39, 39 - 43.

1 岐阜大学教育学部平成22年度卒業生